LDの可能性のある子どもの困りと就学前の関わり

講師 竹内 吉和 竹内発達支援 Co. 代表

1. はじめに

今日は広島から皆さんに配信をしています。よろしくお祈りします。まず、簡単に自己紹介をします。元々は教師をしていて教育委員会に長くいましたが、今は、臨床心理士や公認心理師、スーパーバイザーの資格を背景にカウンセラーの仕事をしています。大学で、保育士養成の授業も行っています。

また、YouTubeで「竹内吉和」と検索すると「発達障がい入門」として10分くらいの動画をたくさん配信しています。教育心理関係のコラム、幼児教育関係のコラムも配信しており、「ファミリードクター広島 竹内吉和」と検索するとご覧いただけます。

2. 0歳児からの特別支援教育

今日のテーマは、0歳からの特別支援教育です。特別支援教育は長年大事にされてきています。その中で、自閉症やADHDといった行動や関わりの問題は研究が進み、その子の個性として受け入れて支援をしていくべきではないかということが徐々にわかってきました。一方、認知や学力の問題については教育や保育で関わっていくことで伸ばすことができるのではないかと、手立てをすることができるのではないかと注目されるようになってきました。今日は、学習障がいの問題に、就学前にどう関わっていくと良いかという話をします。少し目新しいテーマになると思います。

まず1つ目に、メリハリが重要です。何もかもに関わることは、教師でも保育士でも無理です。時間も労力もないのが現状です。そこで、一番重要なことはここ！というものを見つけて取り組

むことが重要です。それをどう見つけていくのかということ、本日お話しします。

2つ目に、学力の問題が重要だということが、最近分かってきました。学力の獲得の失敗は、青嵐クライシスや、中年クライシスを招くと言われています。それを予防するという観点でも、幼児教育が重要だと言われるようになってきています。人間の一生の中で、誕生し、保育園・幼稚園の幼児教育を受ける6歳くらいまでの時代は、比較的安定しています。最初の曲がり角が来るのが、12歳からの青年期です。0～6歳でつまずき、そこに適切な支援が入らないと、中学校の時、早い子どもであれば小学校の高学年くらいから荒れ始めます。ですから、0～6歳が重要なのです。青年期を乗り越えた方は、20歳代・30歳代となっても比較的安定しています。次のクライシスは、中年期の40歳代・50歳代くらいに訪れます。つまり幼児期に安定して過ごすことが、青年期・中年期のクライシスの予防にもなるということです。そのため、幼児教育は極めて重要だと、国も改めて見直し、予算をつけて、具体的に丁寧に取り組を進めていこうということになっています。中年クライシスを乗り越えると、安定的な時代となり、その後老後を迎えるというのが、人間の一生です。つまり、青年期と中年期をターゲットに支援に取り組んでいく視点が重要だということです。

例えば、東日本大震災の発生後、私はカウンセラーとして、現地に行っていたのですが、目の前で人が死んだり、身近な人が亡くなったり、怖い目にあったりした危機を経験した人たちがいます。中でも、12歳から20歳くらいだった人で

支援がうまく入らなかった場合、現在の25～33歳になってもしんどい思いをしています。それから、バブル経済の崩壊後は、なかなか就職することが厳しく、この頃の就職氷河期を経験した人は、現在、40歳～50歳になり、しんどい思いを感じている人がいます。これを中年クライシスと言います。学びについて元々苦手な特性をもっている人に対して、何の支援も入らなかった場合も、これらと同じような様相を呈してしまいます。思春期に危機になり、その後、中年期にも危機になります。そういう視点を持っていると、子どもへの支援も違ってくるのではないかと思います。

3. テーマ「こどもらしく笑える社会を」

(1)この20年間の特別支援教育について考える。

まず、20年間の特別支援教育を振り返ってみましょう。特別支援教育は、平成19年の法律改正により、取組が始まりました。従来の特別の場で指導を行う特殊教育の対象となる障がいの子どものだけでなく、発達障がいなどで、通常の学級にいる子どもが、対象になったということが重要です。多動の子どもがいたり、こだわりの強い子どもがいたり、教室に入れなかった子どもがいたりという姿が始まりでした。しかし、なかなか取組がうまくいきません。教室に入れなかった個性や、多動である個性は元々の個性なので、そこを止めようと思っても無理だったのです。では、何が取り組めるかと考えたところ、学びの問題は支援によって変えられるのではないかと、ということがわかってきました。教育という本質に目が向いてきたということです。

特別支援教育では、制度改革も行われ、総合的な特別支援学校ができました。学習障がい等の発達障がいの子どものは、通級による指導を行うとして学校に位置づけられました。しかし、制度は整ったけれど、具体的な取組が機能していないと言われています。「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」を作成し、共有し、活用した具体的な支援・指導を行うことが重要なのですが、なかなかできていません。これは、幼児期から積み上げていってほしいことです。幼児期に弱さのあっ

た子どもも、明確な実態の把握があれば小学校で支援してもらえます。例えば、定期テストの解答欄を変えてもらったり、別室を用意してもらったり等の配慮をしてもらえます。大学入試でも時間の延長や別室での受験が行われたり、解答用紙も少し書きやすいように変えたりするということも始まっています。それには、幼小中高の取組の継続が背景にあります。つまり、幼小中高でうまく支援が入らなければ、大学入試での支援はもらえないということです。これは危機です。入学試験で嫌な思いをして、中年クライシスに結びついていくということになる危険があります。このような配慮が必要な時代になっています。

制度上でいうと、通常の学級と特別支援学級とがありますが、通常の学級の中にたくさん支援の必要な子どもたちがいるのです。少子化で全体の子どもの数は減ってきています。しかし、特別支援学校の人数は莫大に増えています。特別支援学校を建てても、すぐに教室不足になる現状です。私も教育委員会の特別支援課で、特別支援学校をつくる事業をしていて、いきなり教室不足になるという経験を何度もしました。特徴的なのは、自閉症・情緒障がいという対象が増えてきたということです。知的障がいの方は一定数いて、増えてはいますが、自閉症・情緒障がいの方の数は、大変な増え方です。特別支援学級が10学級くらいあるとか、1学年2学級で計12学級が特別支援学級だという学校もあります。幼児教育では特別支援学級はないので、皆さんのクラスの中に、この増えている層の子どもたちがいるということになります。

(2)本当に「発達障がい」なのか？

確かに、増えている実態はありますが、これは、本当に「発達障がい」なのでしょうか。まず、医師によって診断が出たり出なかったり、診断名が違ったりするという現状があります。小さい頃に自閉症と診断を受けたのに、大きくなったらADHDと言われたという声も聞きます。また、保護者が「家では落ち着いているので、幼稚園が悪いんじゃないですか。」と言ったり、幼稚園や小

学校内で、先生によって態度が違ったりするということもあります。保護者が、「私自身も子どもの頃こんな風でしたが、うまくやっています。」と言うこともあると思います。これは、バイオマーカーの問題です。バイオマーカーとは生物学的なマークということで、証拠ということ。多くの病気は、バイオマーカーが明確です。癌ならば癌細胞があります。骨折なら骨が折れています。高血圧なら血圧を測ると高いですというように明確な証拠があります。しかし、発達障がいの特徴にはこれがありません。自閉症の証拠というものはないのです。脳をスキャンしたり、様々な検査をしたりしていますが、明らかな証拠はまだありません。実は、自閉症にしてもLDにしても病気でない可能性があるのです。予算の問題や制度の問題で認定はしていても病気と明確に言えない何かがあるのではないかと、というのが今の考えです。これがバイオマーカーの問題です。そのため、ある程度個性の問題と捉えて、可能なものを支援していこうというような考えになってきています。

今の発達障がいには大まかな3つの分類があります。自閉スペクトラム症（ASD）、限局性学習症（SLD）、注意欠如・多動症（ADHD）の3類型です。その中で、私が注目しているのは、知的な遅れの境界領域です。明確に遅れているとは言えないけれど、境界辺りで知的に遅れている子どもがたくさんいるのではないかと考えています。そして、実は、発達障がいの問題より、知的な境界領域にいるという弱さの方が、かなり指導を難しくしているのではないかと、思っています。発達障がいには、グレーゾーンの子どものも多いです。それは、バイオマーカーの問題です。明確に証拠があるわけではないので、医者が「発達障がいだ」と言えば発達障がいになりますし、親が自分の子どもは「発達障がいじゃない」と医者に行かなかつたら診断は下りません。ですから、園や学校の先生が勝手に診断をして親に伝えると、トラブルになります。グレーゾーンが多くなるので、子どもの実態をつかみ、支援可能なものにターゲットを絞って指導していくしかないというのが

今の考え方になってきています。

(3)「読み書き困難」の発見

そこで、私が今注目しているのは、読み書きの問題です。読み書きの弱さはどういう風に検査するのかということを実際にやってみましょう。おそらく貴重な体験になると思います。検査だけをして意味はありません。重要なのは、検査の結果からその子の強さと弱さを読み取ることです。読み取り方も説明します。読み取ることができれば、支援の具体的なやり方がある程度研究されていますので、対応できますし、悩むことなく取り組みます。今回は、入門的なものになります。

※以下、テスト体験等をします。

テスト等出典：『読めた』『わかった』『できた』
読み書きアセスメント 活用&支援マニュアル
(平成29年、東京都教育委員会)

興味のある方は、「東京都教育委員会」「読み書きアセスメント」と検索するとダウンロードするページが出てきますので、検索してください。

体験1（読み困難）ひらがな単語読みテスト

たくさんの文字が並んでいる中に2文字か3文字の「もの」の名前が隠れています。左から右に探していき、見つけたら、○で囲みます。

テスト体験

このテストは小学生でやっています。小学校6年生では、○が8個以下の子どもはA（得点下位5%層）です。たくさんの人数に実験した結果です。なぜそうなるのかではなく、実験結果として見てください。9個しか○ができなかった子どもはB（得点下位10%層）です。このテストで、読みの弱さがあるかどうかは明確に見分けられます。医療や医学等、厳密に診断したいときにはAの方で評価をします。教育や保育であれば、より広く見つけ出したいという思いから、Bの方で評価をします。この検査では、○が9個以下の子どもは弱さがあると言っています。これは、努力して解決できる問題でなく、元々弱さをもっている、むしろ支援を入れた方が良いというこ

とです。これが従来の教育の考え方と大きく違います。アセスメントして弱いならば、本人にはどうにもできないことなので、そこに適切な支援を入れていくことが大事です。これが特別支援の最新の考え方です。10個以上○ができた人は、弱さはないということです。この人には、「家で教科書を5回読んできなさい」等の宿題を出しています。しかし、8個とか6個とかしか○ができなかった子どもに、「家で5回読んできてください」という宿題は、適切とは言えず、やがて読まなくなり、国語嫌いになりかねません。アセスメントして、弱さがない子どもであれば、どんどんやらせればいいのです。努力させる子どもには、自信を持って努力させれば良いと思います。しかし、元々の弱さをもっている子どもには別の方法を取っていきましょうということです。

9個しか○ができなかった子どもは、音読に時間がかかり、読むことに対して消極的である、文末を正確に読まないことがある、一文字ずつ読む（逐語読み）ことがあるといった行動の特徴があります。このような特徴のある子どもはクラスにいます。このような特徴のある子どもはクラスにいます。本当は弱さをもっているのか、頑張ればできるのか、と先生方が自信をもてずに関わっていると思います。そんな時は、先ほどの検査をして、子どもの弱さを把握できれば、自信をもって関わるすることができます。弱さをもっている子どもであれば、繰り返し練習をさせるよりも別の支援をしようと区別をすることができます。これはすごく重要なことです。支援の工夫としては、「フラッシュカード課題」や「単語完成課題」等、単語に慣れるトレーニングをしたり、教師が単語を見せて学級全員に読む課題を反復したりする等が、考えられます。

体験2（読み困難）特殊音節テスト

正しく書かれている言葉の番号に○をつけます。「けしごむ」「けしこむ」「けしごうむ」と並んでいて、「けしごむ」に○をするということです。全部で12問です。このテストは時間制限がないので、自分のペースでやってください。

テスト体験

このテストでは、12点取れたら弱さがないと言っています。得点下位10%層のBで見ると、小学校3年生以上は全部11点以下です。つまり、11点以下の子は弱い、12問読めないと言った必要だと言っています。これが研究成果です。このテストをただで、その子どもに弱さがあるかどうか、すぐにわかります。11点なら弱いので、支援がいるということです。その子どもに間違っただけを10回書くという宿題を出すのは、適切な支援とは言えません。明確な根拠に基づいたアセスメントをして、12点取れた子どもは鍛えればいいのです。12点読めない子どもは支援をなささいということです。「ん」とか「っ」とか「ょ」の読み間違いがある子どもへの支援も明確に挙げられています。「支援の工夫」（※『「読めた」「わかった」「できた」読み書きアセスメント 活用&支援マニュアル』に掲載）に基づいて取り組んでください。

体験3（聴覚記憶）順唱テスト

耳から聞いて音を覚えるというテストです。言われた数字を聞いて覚えます。数字を言い終わったら、「はい」と言うので、数字を聞こえた通りの順番で左側から書いてください。まずはペンをその場においてください。そして書き終わったら必ずペンを置いてください。

テスト体験

最高点は6点で、評価のBの得点下位10%層で見ると、6年生で5点以下です。つまり、このテストで6点を取らないと、その子どもは聞く弱さをもっているということです。その子どもが、忘れ物が多いからといって、「よく聞いておきなさい」「何回言わせるんですか」と言うのは正しい指導ではありません。本人の努力や問題ではなく、聞く弱さがあるというだけなので、支援が必要です。行動の特徴として、（忘れ物が多く課題を忘れやすい）（理解をしていても短い文で話すことが多い）（会話が短くなる）ということがあります。幼児期にもかなり発見できると思います。また、小学校で九九が覚えられない子どもも、実は努力の問題ではなく、聴覚記憶が弱かったとい

うこともあります。九九は大概、読み上げて耳で教わっていると思いますが、この方法では覚えられません。聴覚記憶が弱いと判断された子どもに九九を教えるのであれば、九九表を見せる方が良いでしょう。このタイプの子どもは、映像で覚えているので、順番通りでなくても言えたりします。どちらが良い、悪いの問題を言っているわけではなく、支援の仕方を考えて、その子どもに合った別のやり方で働きかけるという方法があるということです。

体験4 (漢字の読み書き) 漢字の読み書きテスト

漢字の読み問題です。問題は20問です。これも時間制限はありません。皆さんのペースで読んでください。

テスト体験

このテストは、小学校6年生はA(得点下位5%層)が12点以下で、B(得点下位10%層)が15点以下です。日本人は、15問読めても弱い、漢字はかなり読めないと弱さをもっていると判断されるということです。ですから、漢字の読みの教育が大切なのです。これで、16問読める子どもは、繰り返し読ませて練習させたら良いということです。20問読めるようにして、次の学年に送ったらいいです。日本では、読みが重要で、読めないとかなり弱いという判断をされることがわかります。

体験5 (漢字の読み書き) 漢字単語の書きテスト

漢字の書き問題です。20問、漢字を書いてください。

テスト体験

自己採点してください。最高点が20点です。評価基準は、B(得点下位10%層)でいうと3点以下です。全部で20問あって、3点以下の子どもが弱い、4問書けると弱さはないと言っています。読む方は16問も読めないといけないのに、書く方はそんなに書けなくても良いということです。この検査をして3問以下の子どもに、宿題で「漢字を50回ずつ書いてこい」というのは、間違った指導ということになります。読み書きの

学びは、読みが中心ということ覚えておいてください。読ませる指導が重要ということです。考えてみると、今はスマホを持っているので、書けなくても調べれば良いので困らないのですが、読めないと調べようがないので、苦勞をします。現在のイメージとも合致します。

この検査項目で重要なのは解釈です。漢字単語の読みの習得には、1~4年生までは、ひらがな単語の流暢な読みの達成と、特殊音節表記の達成が関与します。ですから、先程のひらがなの読み、特殊音節の読みに弱さがなければ指導していけば伸びていきますが、弱さがある子どもには、同じように指導するのではなく、先ほどの支援の方法を使います。5~6年生では、聴覚記憶の検査をして、聴覚記憶の弱い子どもには支援を入れないと、子どもが苦勞します。「支援の提案」(※『「読めた」「わかった」「できた」読み書きアセスメント 活用&支援マニュアル』に掲載)も資料にありますので、また見てください。

質疑応答

ここまでで、質問や感想を聞かせてください。

(質問)

このようなテストは、実際学校で全員にするのですか。

アセスメントの検査は、様々なレベルのものがああります。今日紹介したものは、誰がやっても良い、何の資格もいないものを紹介しました。公認心理師や臨床心理士の資格をもっている人や、研究者しかできない検査もたくさんありますが、今日紹介したものは、やろうと思えば皆さんにもできます。また、検査するにあたって基本的には親の了解が必要ですが、今日紹介したものはそんなに厳密ではありません。体験してみても遊びのような感じだったと思います。ですから、全部をやらずに一部を少し遊びでやってみることも可能です。全員にやるのが良いと私は思っていますが、実際はやっていません。特別支援教育の研究をしている学校ではやっている所もありますが、研究をしていないと小学校の先生もこういうことを

知らないと思います。研修を受けてやってみたと
いう学校はあります。やってみると、なぜこの子
どもがこうだったのかがよく分かったと言っ
ています。今日紹介したものは、やろうと思えば全
員に試せます。実は、多くの日本の年長児はひら
かなが読めますので、読めない子どもは支援の必
要な子どもの可能性があるかもしれないという
ことになります。

(質問)

LDは乳幼児期からの言葉に触れる経験
の不足が影響しているのでしょうか。

影響していません。LDの子どもは、元々の弱
さをもった子どもなので、経験は関係ありません。
弱さのない子どもなら、言葉に触れる環境が良け
ればすごく伸びますし、環境がなくてもある程度
は伸びます。今言っているのは、環境の問題では
なく、元々の脳の機能の問題で、読み書きが困難
な子どものことです。ですから、別の方法で支援
してくださいというのが、今日説明したことです。

(質問)

漢字があまり得意でない子どもに90点以
上になるまで再テストをしています。B(得
点下位10%層)以上の子どもならば、特別
支援というよりがんばらせて良いということ
でしょうか。

そうなります。そういう指導をする前に、弱い
子どもの観察の項目(※『「読めた」「わかった」
「できた」読み書きアセスメント 活用&支援マ
ニュアル』に**実態把握**として掲載)を見て観察し、
子どもたちに弱さがあるか判断することが大事
です。もし、弱さをもつ子どもがいるとしたら、
クラス全員で再テストをやるような指導をする
ことは危険です。弱さをもつ子どもがトラウマを
もち、しんどくなる可能性があります。それが進
むと、青嵐クライシスといって、青少年の時に、
勉強からの逃避が始まる可能性があります。

(質問)

このテストは一度の結果で判断するものな
のでしょうか。それとも数回実施する必要が
あるのでしょうか。

数回する必要はありません。数回すると前のテ
ストのときに学習していると思いますので、1回
やれば良いです。

(質問)

幼児期でできるテストもあるのでしょ
うか。

基本的に今回のような簡便で誰もができるも
のではありません。しかし、資格をもった人間が幼
児期にやるものはあります。病院等に相談すれば
できますが、病院も専門家がない場合があるの
で、相談しても分からないという回答が来るかも
しれません。「答え」としては、「ある」。ただそ
れは、専門家しかできないということです。今日
は専門家じゃなくても誰でもできるものを紹介
しています。誰もができるということと、検査と
いうのはこういう風にできているということ
を指導者が知ることが重要だと思うからです。今
回の研修を受けて、子どもを見る目ができてく
ると思います。幼児期の担当者がこの研修を受
けていることが、ある意味とても実験的であり、
面白いと思います。

(質問)

年長児で字の興味が深まらない・弱い子
どもの保護者にどう伝えたら良いか悩みます。

悩みますね。可能性としたら、弱さをもつて
いることもあると思います。まずは、環境を整
えて、働きかけてみましょう。環境の質を高
めると興味があったというのであれば、元々の
弱さがなかったということになるので、親に
伝えるのではなく、環境をまず整えてみて
ください。言葉遊びとか色々な事やってみ
て、乗ってくれば弱さはなかったというこ
とです。それでもだめだったという子
どもは、元々の弱さがあるので、小学校に
つなげて、小学校で支援をしてほしいと
伝えることが

大事です。親には特に言う必要はないと思います。下手に幼児期から言うと、トラブルに発展します。もし子どもが弱さをもっていた場合、親は、小学校に入ったら否が応でも、向き合わないといけません。幼児教育の先生は小学校につなげるということが重要です。

(質問)

幼児期にできるテストのことを、先ほど言っていたのですが、それが発達検査になるのですか。

発達検査とは別物です。ディスレクシアと言っていて、読み書き困難の検査で、別のもので、かなり専門的なものです。臨床心理士でも、みんなができるものではありません。一般的な発達検査の一部分に読み書きのことが少し見える部分があります。しかし、こんなに明確には出ません。ですから、幼児期の先生は、観察が重要になってきます。今日は、たくさん実態把握(※『「読めた」「わかった」「できた」読み書きアセスメント 活用&支援マニュアル』に掲載)について書いていますので、改めて読んで、弱さをもった子どもはこういう特徴をもっていると思って、観察をしてみてください。弱さをもっている子どもの特徴と合致すれば、その子どもは弱さをもった候補に当たるといいますので、支援を入れてみる、そんなことを取り組んでもらえれば良いと思います。

(質問)

新版K式検査での認知の指数がどれくらいの子どものが、得点下位10%層の子どもに当てはまることが多いでしょうか。

発達検査でいうと、平均的な子どもが前提です。知能検査でいうとIQ相当値が80以上です。知的な遅れのない子どもとってください。知的な遅れのない子どもにこの検査を行うと、先ほどの点数で判断できます。知的な遅れのある子どもは、それは知的な遅れなので、読み書き困難ではありません。今回挙げた支援は、知的な遅れのない、読み書きの困難をもった子どもへの支援です。知的な遅れではないので、早く取り組めば、その子

どもは支援できます。知的な遅れがある場合は、自分で身の回りのことができる等、目標が違ってきます。今日は、通常の学級に入る子どもをターゲットに話をしています。読み書き困難の子どもは、目標は同じでも良いのです。支援を入れれば学力を高められます。

(質問)

字が苦手な子どもに対して、まず先に字を読むことを誘ってみる方が良いですか。

その通りです。今日皆さんに提示したことが教えているのはそこです。読むことをまず重視しろということ。言葉遊びは、読むことにつながっているの、言葉遊びは重要です。幼児期にしている様々な言葉遊びは、読み書きの弱さをもった子どもへの一つの支援でもあります。言葉遊びが小学校に入って生きてくる可能性があるということです。ぜひ、言葉遊びとかしりとりとか、たくさんやってほしいと思います。

読み書き困難指導例

では、後半に入ります。

例えば、弱さをもった子どもへの指導例として、「ねずみ」が読めない子どもにおはじきを3つ並べて見せて、「ね」の音はどのおはじきですか、と聞いて、「これです」と言わせてみます。「い」を教えるのに、「いぬ」の「い」と教えて、「いぬ」の絵を提示するという指導もできます。これは、「プロンプト」として絵を使っています。そう考えると、絵本はすごく良いと思います。

そして、特殊音節であれば、「でんしゃ」は(●●●-●)のように「しゃ」をこんな記号(●-●)で教えます。全部同じ黒丸でやると弱さのある子どもはわからなくなりますので、「きっぷ」も(●□●)のように「っ」のところをこんな記号(□)を当てはめます。これは、音記号単語カードというやり方です。音記号単語カードと検索すると指導例が出てきますので、興味のある方は、調べてみてください。また、同じ特殊音節でも、難しさの程度があります。「きゅうり」と「きゃべつ」、「ちょうりよくけんさ」と「でんしゃ」、「きやり

「ぱみゅぱみゅ」と「かとうちゃ」、「こうちゃ」と「ぎゅうにゅう」、これらは同じくらい難しいかというとなんかそんなことはありません。絶対に「きゃりーぱみゅぱみゅ」の方が難しいので、易しいものから教えていくということが重要です。高頻度音（よく出てくる音）と、低頻度音（あまり出てこない音）とでは、低頻度音の方が難しいので、易しい高頻度音から教えていってください。

また、次のような指導法もあります。「おおきな」の下に「お●きな」と書き、「(●)」の部分に、何が入りますか」と聞く言葉遊びです。また、書きの弱さがあると、「かいしゃではたらく」という文章を、いきなり漢字を書かせようとしても書けません。そこで、まずは色々な漢字を書いたカードの中から「会社」を選ばせるというやり方があります。カードで選ばせる練習から始めてみる方法です。

(4) 0歳児からの特別支援教育

(SLDを中心に考える)

では、0歳からの特別支援教育について考えていきます。幼児期こそ学習能力の問題に注目したいと思っています。早期発見・早期対応が重要であり、学びの土台は幼児期に作られるので、幼児期は重要です。学びの挫折は中年クライシス等、人生にわたって大きな影響を与えます。

発達心理学の教科書に出ている、乳児から幼児期の発達の目安を、読み書き困難に関する項目に注目して整理をしました。

9か月から読み書きが影響してきます。この頃から、喃語から意味のある単語になっていきます。喃語は反復性があり、同じ音声、音節の繰り返しが多いという特徴があります。これがなかなか出てこない場合、もしかしたら読み書き困難な可能性があるかもしれません。

1歳からは、重要な時期となっています。数語の単語、マンマ、パパ、ママ等が出ます。誰の名前にも「はい」と言ったり、指差し行動が出てきます。こんな姿が出てこない場合、もしかしたら弱さをもっているかもしれません。自閉症等の弱さだけではなく、もしかしたら、読み書き

の弱さをもっているかもしれないという可能性もあることを知っておいてください。

1歳半からは、目・鼻等が指せるようになりませんが、これが指せない子どもには、実は読み書きの弱さがあるかもしれません。読み書きの弱さからくるものであれば、カードを使って、視覚的なものと「め」という言葉を組み合わせて教えることが効果的です。知的障がいがある場合は、この方法でもうまくいきませんので、例えば、口だけは指せるようにする等、目標が変わってきます。

1歳半から2歳は、盛んに物の名前を尋ねる時期ですが、なかなか尋ねない子どももいます。この頃は、300語獲得しますので、もし少ないようでしたら、読み書きの困難をもっている可能性があります。名前を呼ぶと「はい」と言うといったことが重要です。

2歳からは、接続詞や助詞が使えるようになります。過去と未来の表現ができたり、赤や青の色がわかったりします。実は読み書きとか言葉の弱さで、赤・青の色がうまく表現できない子どももいます。赤の色は分かっているし、青の色も分かっているけれど、色と言葉が結びついていない場合があります。

3～4歳では、1600語くらいの語彙数を身につけ、かなり大人と自由に話せるようになります。そのため、3～4歳児を担当した時には、言葉の環境が重要です。

4～5歳は3語文以上を復唱できたり、3つまで数えることができたりします。就学前には、いよいよひらがなや数字を読めるようになっていたり、4桁の数の復唱ができるようになっていたりします。このように乳幼児の発達の読み書き困難に関する箇所だけ、注目してみました。

生まれてすぐに発達障がいについてわかるといえるものではありません。重度の場合は、1歳6か月検診の頃には、明らかに他の子どもたちと違うので分かりますが、軽度の知的障がいの場合は、見かけは同じなので、少し遅れているけれどなんとかできているからと、発見が遅くなります。5歳くらいが分岐点となり、軽度の知的障がいや発達障がいが出てきます。SLD（限局性学習

(感想)

竹内先生に教えていただき、悩んでいたことが少し解消されて、心が軽くなりました。ありがとうございました。

(前半、字が苦手な子どもに対して、まずは字を読むことを先に誘ってみる方が良いですかとご質問いただいた先生より)

先生方は、たくさんの子どもを一度に見ないといけないし、やることもたくさんある、となると、メリハリをつけることが重要です。そのためには、何が大切かということを検討して、大切なことを優先すると良いと思います。

(質問)

読み書きの弱さは、理解の弱さと比例しますか。

比例しません。読み書きが弱くても理解が高い子どもはたくさんいますし、読み書きの弱さをもった研究者もたくさんいます。実際にいた中学生の子どもですが、読みの弱さがあって、文章で書かれたテストを白紙で提出していました。そこで、担任の先生に「テストの問題を読んであげてください」と伝えました。すると、「問題を読んだら即答で答えが返ってきました」と驚いておられました。つまり、その子どもはただ読めなかつただけで理解はしていたのです。そんな子どもがいるということを知らないと、たくさんの子どもの才能をつぶすことになります。

(質問)

言葉遊びが重要とのことでしたが、しりとり以外にもお勧めの言葉遊びがあれば、お聞きしたいです。

集団でやるならば、しりとりが一番良いです。あと、「夕抜き」の言葉遊びで、「夕」を抜こうとか、言葉の〇〇を抜こうという遊びも良いです。数え歌も良いと思います。また、カードとひらがなを結びつける遊びもとても良いです。好きな方は自分でつくられたりもしますが、絵カードや写真カードとカタカナやひらがな、場合によっては

漢字等の言葉のカードをつくっておいて、合わせていくカード合わせのような遊びも良いです。そんな本がたくさん売られていますので、それを教室に置いておくのも良いと思います。子どもたちは喜んで読んだりします。そんな環境をつくるというのが大事です。これらを参考に取り組んでもらうと良いと思います。

(質問)

自分がテストを体験してみて、全然漢字が書けなくて、子どもだけでなく、自分の弱さにも気づくことができました。

研究者は、たくさんの実験をしてその数字を出すことにすごくエネルギーをかけています。これらのテストを使って子どもの弱さを見極めることが重要です。それがわかれば、取組も変わってきます。弱さがあるとわかったら、支援を入れたり、その子に合った取組をすれば良いのです。そして、その取組を書くのが個別の支援計画や個別の指導計画です。難しいことではなく、具体的な取組をたくさん入れていくと、実用性があるものになると思います。

(感想)

体験をしてみて、「できる」の基準が高いと感じました。また、今後支援が必要な子どもが増えると感じました。生きていく上で大切な基盤の時期に関わるこの仕事の大変さや保育者の関わり方の重要さに気づかされました。

本当に幼児期が重要だと思います。私は、元々は小・中・高の教師でしたが、今は幼児期が本当に重要だと痛感し、幼稚園や保育園に行って先生への研修をする等、幼児期に関わられる施設へ行くことを優先的に選んでいます。

(感想)

発達障がいの中でも、限局性学習症は認知の問題であるため、大人の支援により子どもが抱える困難を和らげることができるということがよくわかりました。支援のためには障がいに関する知識が必要だと思うので、勉強を続けていきたいと思いました。

今、学習の問題に取り組むと、先駆的な先生になれると思います。今後、この問題がクローズアップされてくると思いますので、特に幼児期の先生が、読み書きや言葉の問題に取り組むと、将来的に意味もあるし、ニーズも高いのではないかと思います。専門的になりますが、現場で子どもを見ておられる先生方なので、力になると思います。ぜひやってみてください。

(質問)

しりとりをしていると集中力が切れてしまう子どもがいて、続かない子どももいるのですが、周りの子どもたちがしりとりあそびをしている言葉を聞くだけでも、良いのでしょうか。

子どもは飽きたら終わりですから、飽きたものを続けるより、飽きたならやめた方が良いです。カード合わせ等別の活動に誘う方が良いと思います。また、子どもの様子を見て、長時間取り組むグループと、短いスケジュールでいくつかやるグループに分けた方が良いと思います。その時に重要なのは、スケジュールの明確化です。これを構造化と言います。飽きている子どもに無理にやらせようとすると、先生も疲れます。常に飽きずに取り組めるものはないかと、考えてほしいと思います。

(感想)

私は4つの数字を覚えるのも必死でした。確かに聴覚記憶が苦手です。自然とメモを取る・図で理解しようとする癖がついています。子どもが自分の苦手に気づき、工夫ができたら良いなと感じました。

実は、聴覚記憶の弱さをもった人はたくさんいます。メモを一生懸命取る人は、もしかすると弱さをもっているのかもしれませんが。その場合、口頭での指示だけでは頭に入りません。誤解されがちですが、聴覚的な弱さがあるだけで怠けているわけではないので、大人になるとメモを取ることで、カバーをしている訳です。本人が聴覚的な弱さに気づいてなければ、周りの人がメモで渡す等カバーすることもできます。また、ホワイトボードや黒板が職員室にあるなら、活用した方が良いでしょうと思います。今までのやり方が当たり前だと思わずに、伝達事項はどんどん書き、それを読むという機会が増えると、聴覚的弱さをもった人も理解しやすいと思います。そんな子どもも大人もたくさんいるということです。

最後に読み書きテストの出典は、東京都教育委員会の『「読めた」「わかった」「できた」読み書きアセスメント 活用&支援マニュアル』です。これは、一般公開されているので、そのまま印刷しても、どんどん使っても大丈夫です。「東京都教育委員会」「読み書きアセスメント」と検索してもらおうとダウンロードするページが出てきます。興味のある方は検索してみてください。

※東京都教育委員会が作成した小学校における学習の「つまずき」を把握するアセスメント方法です。一人一人の実態を適切に把握し、適切な指導・支援を実施するための活用を目的としています。就学前の子どもへの使用については、以上の目的を十分理解し、慎重にお願いします。

令和6年度第7回共同機構研修会

令和6年10月11日

於：京都市子育て支援総合センター

こどもみらい館